Explanation

# 旅と学びを哲学&検証する

——旅は、人を成長させる。

誰もが、体験的に感じていることでしょう。けれど改めて「なぜ」「どのように」と問われると、答えに窮してしまうかもしれません。

そのヒントを得ようと、旅と学びの関係について哲学的に考えている、あるいは科学的な検証を試みている識者にお話を伺いました。

第1部では、教育哲学の視点から、神戸女学院大学文学部の奥野佐矢子教授に、ゲーテのエピソードなども絡めて、旅がもたらす人間形成的作用について語っていただきました。

第2部では、〝旅と学びを科学する〟ことを目的に2020年に誕生したコンソーシアム「旅と学びの協議会」の取組についてリポート。同協議会理事でもあるANAホールディングス執行役員津田佳明さんを通して、協議会の設立背景や、実践・検証を通してわかってきた科学的知見について紹介します。

interview 第1部

## 旅を哲学する

### 『イタリア紀行』に見る、自らが生まれ変わる旅

ドイツの詩人ゲーテが1786年から2年間を過ごした憧れの地、イタリアの思い出を綴った『イタリア紀行』は、ディテールで埋め尽くされています。例えば、「屋根には南瓜がのしかかり、珍奇無類の胡瓜が棚や格子垣にぶらさがっている」（相良守峯訳）など、馬車の窓から眺めた旅の瞬間さえ一つひとつ生き生きと描写されているのです。

ゲーテが楽しんだのは風景だけでは

取材・文／堀水潤一　撮影／山内城司（第1部）、平山 諭（第2部）

ありません。当時流行っていた、英国の支配階級や貴族の子弟が学業の仕上げとして行うグランドツアー＝教養旅行の目的の一つは、イタリア各都市に駐在する大使や貴族のサロン、アカデミーに集う人々との交流でした。そこから新たな芸術や学問が生まれたわけですが、ゲーテの興味もまさにそこにありました。本人も書いているように、イタリアの旅は、自らが生まれ変わることも目指した教養の旅であったのです。

## 近代的な自我の目覚めによって自分と他者との関係が問題に

ゲーテの例を出すまでもなく、旅をすることと成長することは相性が良く、人間形成的に大切な意味をもちます。旅を通じ、「私」という自己意識の輪郭がはっきりするからです。

ちなみに、西洋において「私」という概念が明確に表れてくるのは18世紀に入ってから。それまで、特に中世のヨーロッパでは、自己意識は神との契約、あるいは共同体との強い結びつきのなかに埋没した状態にありました。自己意識という概念がクローズアップされはじめるのは近代に入ってからです。

ただし、そうなると今度は、自我に目覚めた「私」が、私を取り巻く「他者」との関係をどう引き受けるか、という新たな課題が各自に突き付けられることになります。そうしたことも背景に、当時流行ったのが、後に教養小説と呼ばれる、世界とのやりとりを通じて人間的成長を果たす成長譚の一群です。

例えば、教養小説の代表といわれる、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は、富裕な商人の息子が、狭苦しい境遇を嫌って家を飛び出し、旅に出る物語です。旅の途上で出会いを繰り返し、さまざまな境遇に身を置き、人生経験を豊かにした彼は、やがて果たすべき社会的使命に気づくのでした。

この大作を執筆した背景に、ゲーテ自身のイタリア旅行の影響があることは想像に難くありません。

## 蒸気機関車が奪った時間・空間の概念と見知らぬ人同士の交流

さて、旅の姿は産業革命によって大きく変貌します。それまでの移動手段といえば馬車であり、ゲーテが描写した前述の風景も馬車の窓から見たものです。それが蒸気機関車にとって代わることで、時間と空間の概念は崩れ、車窓の風景は、次々と現れては消え去っていく目まぐるしいものとなりました。『鉄道旅行の歴史』（W・シヴェルブシュ）に詳しいのですが、旅の情緒が減る一方で、鉄道の登場は意外な習慣を旅人に根付かせました。読書です。長い時間を要した馬車の旅と異なり、鉄道では相乗りした他人と無理に交流する必要がありません。そこで、車内で読書をするようになったのだとか。その様子は、黙々とスマホの画面に見入る現代人の姿に重なります。

## すべてをコントロールしようとせず、偶発性も楽しむ

旅の形は時代によって変化しますが、旅のもつ人間形成的意味は今も変わらず存在しています。個人的に、大切だと思うキーワードは、他者性と偶発性。自分ではコントロールできない自分以外の何かとつながる経験です。

旅に喩えられることが多い「人生」にも同じことがいえると思います。例

神戸女学院大学文学部
**奥野佐矢子**教授

おくの・さやこ●専門は教育哲学・人間形成論。学校教育に留まらない、人生のあらゆる局面で起動する「学び」を扱う。多様な文化・価値の混在する現代社会で「私」の認識や行為はどう創られるのか。英米圏のアイデンティティ政治学やフェミニズム研究などを手がかりに、今日的な人間形成モデルを探る。写真は、神戸女学院キャンパス内ソールチャペルにて。

建築家ヴォーリズの細緻な設計が美しい神戸女学院キャンパス。

えば人生の最初から自分自身で「こうなりたい」と決めたゴールに向かって、すべてをコントロールしながら最短距離でたどりつける人は少ないのではないでしょうか。むしろ人生の旅路において、予期せぬ出会いや偶然の導きによってもキャリアは築かれていくわけです。

ただ、そうしたことは年齢を重ねて人生を振り返るとわかるものですが、若い学生さんたちには実感しにくいことかもしれません。特に最近の学生さんは失敗を恐れて慎重になるあまり、結果として効率を重視したり、最短距離を選ぼうとして、そこにある豊穣なものを切り捨てているかもしれません。例えば、海外留学の際に、就活に間に合うよう短期のプログラムを選択する学生や、卒論執筆にあたり、読まなくてはならない本を最低限にしぼり、それ以外の本を読むことは無駄ではないかと考える学生など。けれど、長期の海外生活によってこそもたらされる経験や気づきがあるでしょうし、一見無駄のように思われる読書をどれだけ積み上げたかが、卒論に厚みをもたらすのです。効率重視の選択肢だけで構成された人生は、整ってはいても、どこかつるんとした印象が残ります。旅行でいえば、安全で効率的ではありますが、自由行動がないパックツアーのようといっては言い過ぎでしょうか。

近年は、個人旅行であっても、スマホ一つで詳細な情報を得ることはもちろん、現地の人とひと言も交わさないまま、移動も食事も宿泊も可能です。自分ですべてを思い通りにコントロールできる旅は確かに快適かもしれませんが、他方ですべてが予測の範囲内であり、ゲーテが感じた自分が生まれ変わるような圧倒的な経験からは遠ざかっていくような気がします。

思うに、私たちがすべてをコントロールしようと欲するのは、「もし失敗したら自分は立ち直れない」など、失敗という経験を、リスクとして恐れすぎているからではないでしょうか。あるいは、失敗しても何とかなるという自信や、土壇場でこそ発揮できる自分のポテンシャルを低く見積もり過ぎているのかもしれません。「失敗しても何とかなる。むしろ予想外のことが起こるなんて、楽しい」という偶然性への信頼があれば、すべてをコントロールしようと躍起になる必要などありません。

だから、私はこう伝えたい。失敗や無駄もまた、経験である、と。失敗したり遠回りすることは、あなたが心配しているほどのリスクではないし、そういった経験でこそあなたの可能性が花開くときもある。あなたのもつ可能性が、人生のどのタイミングで引き出されるかはわからない。だから、いつもいるところから離れ、違う環境に身をさらすことも大切だよって。

## 旅の醍醐味は、違和感を呼び起こす他者との出会い

「教育哲学あるいは人間形成論から見た旅とは」と聞かれたら、他者(others)と出会うものと答えます。他者とは「他のもの」を意味し、自己以外のものを指します。他者は人とは限らず、過去の自分だって他者かもしれません。簡単に言えば、自己に対して違和感を感じさせるものすべてを他者といっていいかもしれません。

同年代で構成された教室のような狭い空間のなかでは、自分と他者との違いを際立たせる経験が排除されがちです。変なことを言って空気を悪くするのが怖いから違和感を共有しないよう気を遣う。そうした息詰まる状態を解消する簡単な方法は、異化作用をもった他者を入れることです。例えば異学年の生徒や地域の高齢者など、差異を際立たせる存在を入れることで、違いがあってもいいことに安心する。「こう思い込んでいたけど、それだけではないかも」など、それまでと違う発想が生じやすくなります。

自分から外に出て、異化作用を促す他者と関わるのも同じこと。それこそ旅の醍醐味です。せっかくの旅の経験を、いつもの気の合う仲間から「いいね」をもらうためだけに終わらせてはもったいないと思います。

違和感を共有することを怖がらない。思い切って現地の人に話しかけてみる。そうした小さな勇気が旅の経験を豊かなものに変えてくれるはずです。

## 旅は本質的には個人的な営み けれど一人ではないことも知る

同じ場所に行っても、出会った人や、体験した内容によって印象は人それぞれ違います。一斉に行動することが多い修学旅行においても、生徒一人ひと

りは異なる発見をしていることでしょう。例えば地元の方と交わした会話の内容が心に残る子もいれば、現地の人のイントネーションや食事の味付けの違いに敏感に気づく子もいるでしょう。語り部の方の息遣いから、悲しみや悔しさを肌で感じる生徒も多いと思います。それこそが、ネットの情報や教科書の写真を通じてイメージしていた、どこかつるんとした自分の土地感覚に、ザラザラとした手触りや彩りを加えてくれるもの。そうした個々人が感じる身体性を伴ったディテールに触れることができるのも、旅の経験の価値のような気がします。

個々人が感じる旅のディテールですから、受けとめ方は人によって当然異なります。そういう意味では旅とは、複数で行ったとしても、本質的には個人的な営みなのだと思います。映画『スタンド・バイ・ミー』は、ゴーディという主人公の少年の視点で語られていますが、他の3人が語るとしたら、まったく違ったストーリーになるでしょう。

ただ、旅は個人的な営みだからといって、まったく一人かというと、やはり違います。一緒に旅に行く仲間がいて、旅先で見ず知らずの人たちとの出会いがあって、旅の体験を聞いてくれる家族や友人もいる。自分一人ではないということを体感することも、旅の大切な意味だと思います。

『旅する』
神戸女学院大学文学部
総合文化学科 監修
桐生裕子 編／世界思想社

神戸女学院大学文学部総合文化学科監修の「シリーズ日常を拓く知」の5巻目。哲学、教育学、宗教学、歴史学、文学の各教員によるエッセイ、対談形式で旅の意味を探る。

reportage 第2部

# 旅と学びを検証する

## 「旅と学びを科学する」というムーブメント

2020年6月、「旅と学びの協議会」（事務局：ANAホールディングス株式会社）という団体が発足した。

旅の効用を科学的に検証し、新しい旅の価値の創出と次世代の教育プログラムの開発などを行うコンソーシアムである。参加団体は、ANAホールディングス、日本航空、JR東日本ほか、企業、教育機関、自治体など50を超える。

設立のきっかけは一企業のイノベーション関連部署にあった。同協議会のキーパーソン、津田佳明さんは話す。

「私はANAホールディングスに2016年に新設されたデジタル・デザイン・ラボという組織のチーフをしていました。ドローンや宇宙事業、VRや触覚技術を使った移動体験など、新事業を生み出すイノベーション創出部隊です。そこで実感したのは、イノベーションは日常のなかからは生まれにくいということ。また、幸せな精神状態でないと新しい発想を取り入れる気持ちになれないということです。スタッフも考えは同じで、典型的な非日常体験である旅がもたらす学びについてアカデミックに検証したいという要望がありました。そこで、東京学芸大学大学院の小宮山利恵子准教授を訪ね、

旅と学びの協議会 理事
ANAホールディングス 執行役員
**津田佳明**さん

つだ・よしあき●1992年東京大学経済学部卒業後、ANAに入社。5年間の旅行代理店セールスを経て、1997年営業本部に。航空運賃自由化、ダイレクト販売推進など、新たなビジネスモデルの創造に参画。2016年デジタル・デザイン・ラボチーフディレクター。2020年経営企画部長。2023年より未来創造室長。

旅の効能について意見を交換しました。『日常と異なる環境に身をさらし新しい価値観を理解することで多様性が身につく』『初対面でのコミュニケーションや普段と違う生活で適応力が磨かれる』『ハプニングを乗り切ることで危機対応力が養われる』など話は尽きず、〝旅を多くする人・移動距離が長い人のほうがイノベーティブである〟という仮説が生まれました」

## イノ旅での手応えを契機に「旅と学びの協議会」が発足

それを実証する機会として立ち上げたのが、高校生が旅先で地元の人たちと交流しながら、地域課題解決に向けたアイデアを提案する探究型学習プログラム『イノ旅』だ。「イノベーションに挑む旅」のことである。

その第一弾が2019年4月、地元こゆ財団の協力を得て、宮崎県の新富町という小さな町に、東京の高校生が訪れる形で実施された。

「最初こそ民宿での寝泊まりや、地元の高校生との交流に戸惑っていたものの、すぐ順応していました。グループワークを経て最終日にアイデアを発表するのですが、豊かな発想力に感心させられました。『自分の生活環境とは異なる場所があり、そこで暮らす人々がいることを実感した』『同世代の異なる意見にも共感できる部分が多かった』という感想もあり、多様な価値観を受け入れていたようです」（津田さん）

イノ旅で最も大事にしているのは、五感を使うことだ。

「ネットで得る二次三次情報と、現地に行き五感を使って得た一次情報は大きく異なります。そのことを体感してもらうため、あえて事前にネットで現地のことを調べてもらっています。文字

**図1　イノ旅の特徴と教育的効果**

**イノ旅の特徴**
- 五感を使って一次情報を収集する
- 地域事業者、地域高校生との密な交流
- 共通のミッションに向かって協働する経験
- 日常（コンフォートゾーン）を抜け出す経験

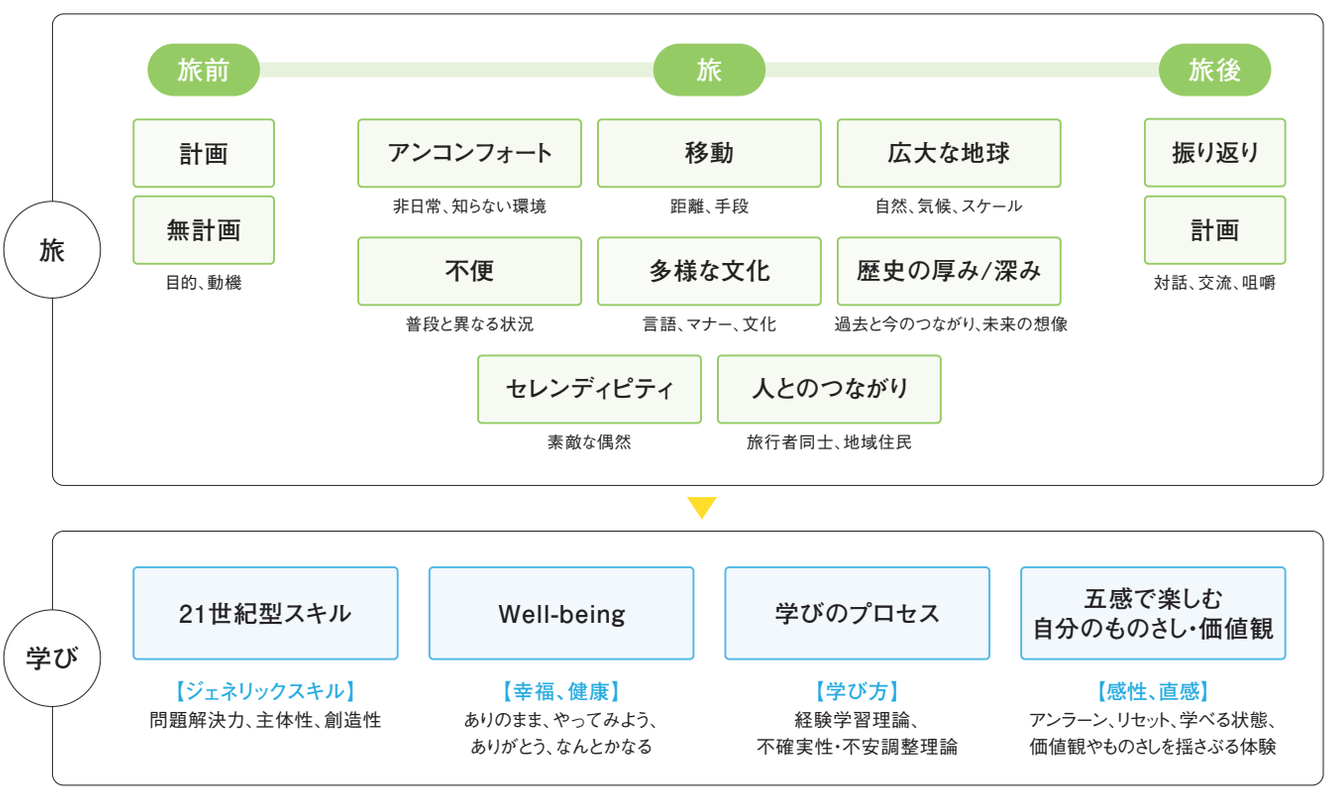
**日常（コンフォートゾーン）**
- 暗黙の了解や一般常識
- 共通の言語
- 変化のない景色
- よく知った友人、知人

**非日常（アンコンフォートゾーン）**
- 通じない常識
- わからない言語
- 見たことのない景色
- 知らない他人

教育的効果
- 課題発見・解決力
- 創造的思考力
- 多様な価値観を受け入れる力
- レジリエンス、やりぬく力
- 主体性、行動力

※協議会の資料を基に編集部で構成。

**図2　旅と学びの概念図**




※協議会の資料を基に編集部で構成。

情報や写真を通してある程度、現地のことを知ったつもりでいても、地域の人から直接話を聞いたり、自分の目で見たりした情報とでは印象がまるで違うことに驚いたようです」（津田さん）

教育的効果（図1）が認められたイノ旅は今も、ANAホールディングスおよび、高校生にイノベーション教育プログラムなどを提供する一般社団法人i.clubの協働事業として複数の高校で実施されているが、取組を単独の事業で終わらすのはもったいない。現代版「かわいい子には旅をさせよ」のムーブメントを起こしたいという思いで立ち上げたのが「旅と学びの協議会」だ。

代表理事には、常々「人間を賢くさせるのは人と本と旅」と語っている立命館アジア太平洋大学（APU）の出口治明学長（当時）が就任。アドバイザーとして、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科の前野隆司教授や、駒沢女子大学観光文化学類の鮫島 卓准教授（現教授）も加わった。小宮山准教授を含め、教育工学、幸福学、観光学の視点から旅の効用について検証する体制が整ったわけだ。

## 科学的に明らかになってきた旅の効用

協議会を構成する企画部、広報部、研究部のうち、「旅の効用を科学的に検証する」という目的に最も沿う組織が研究部だ。同部では、「旅前」「旅」「旅後」のフェーズごとに、どのような要素が、どんな学びにつながるかを概念図（図2）として示し、随時アップデートしている。いくつかポイントを挙げてみる。

- 目的や動機を明確にし、**計画**を立てることが学びに有効に機能する一方、あえて計画を立てない（計画的**無計画**）ことで、現地においてアンテナが立ち、五感が研ぎ澄まされることも。
- コンフォートゾーン（居心地のいい場所）から**アンコンフォート**な場所に飛び出ることで行動変容が起きる。
- **不便**ながらも精神的な豊かさが得られる〝不便益〟が自己変容を促す重要な要素。適度な緊張が学びにつながる。
- 日程をぎちぎちに詰めず意図的に余白をもたせることで、思いがけない出会いや**セレンディピティ**が生まれる。
- 普段接点のない**人とのつながり**によって自己と他者の違いを認知。多様性に対する受容力が高まる。

「**振り返り**」の重要性について、鮫島卓教授は次のように指摘する。

「同じ体験をしているようでも、実際には一人ひとり違う経験をもち得ます。それを可視化するのが振り返りであり、自分と他者との受け止め方の違いに気づく。そうした仕組みがプログラムに埋め込まれていると学びは促進されます」

また、旅が幸せや豊かさにどう影響するかという点について、こう述べる。

「街歩きの実証研究では、スマホのナビを使っているときよりも、道に迷い人に道を尋ねたときのほうが幸福度が高い傾向がありました。人との出会いは再現性がないからだと思います。予め想定をし得ない一期一会の機会を増やすことで幸福感は高まるでしょう」

## 検証プロジェクトを通じて次第に明らかにされる旅と学び

「旅は学びにつながる」ことは感覚的に知るところだが、先行研究は意外にも少ない。そこで協議会事務局や参加

**図3　旅前と旅後でプラスに変化した項目**

| | | |
|---|---|---|
| 著しい変化 | コミュニケーション | 相手の話（考えや意見）を丁寧に理解するために、傾聴の姿勢をくずさない |
| | 主体性 | 人から指示されるのを待つのではなく、何事も自ら進んで取り組み、行動する |
| | | 自らの力を信じ、自らなすべき事を考えて決定し、自ら率先して行動する |
| | 独創性 | 現状に満足することなく、積極的に変化を求め、新たな価値を創り出そうとする |
| | | 既存の概念の枠を超えて、新たな視点で物事を捉え、その可能性を切り開こうとする |
| | 問題発見 | 収集した情報を基に、数ある課題の中から本質的課題を見抜き決断する |
| | 自分らしさの発揮 | 自らの態度や行動を常に振り返り、反省の心を持った上で次の行動につなげていく |
| 中程度の変化 | コミュニケーション | 自らの考えや意見を、相手の関心や理解度に合わせて、わかりやすく伝える |
| | | 適切なタイミングで質問する等、相手が話しやすい環境をつくり、相手の意見を上手く引き出す |
| | 主体性 | 何事においても当事者意識を持った上で、自発的に物事に取り組もうとする |
| | 多様性理解 | 人や物事に対して先入観を持たず、視点を変えてその対象を理解しようとする |
| | 自分らしさの発揮 | 自らの強みや特徴を客観的に捉えた上で、それを積極的に活かそうとする |

※協議会の資料を基に編集部で構成。

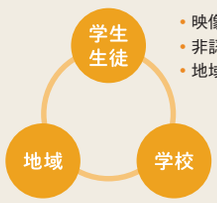
## 検証事例 1　撮影することを通じて地域の魅力を発見する、「撮り旅」プロジェクト

**概要**

学生・生徒と旅をして、おのおのが感じた地域の魅力を撮影・編集し、地域のPR映像としてアウトプットするプロジェクト。完成した動画は地域活性化のために学生自身や自治体などから発信する。2022年春に松山大学で実施したトライアルを皮切りに、各地の大学、高校で実施。旅×映像で生じる教育効果も検証する。（実施団体:AOI Pro.）

**背景と目的**

SNSの普及により、若い世代にとって映像を撮って発信することは日常的に。単に撮影して発信するだけでなく、効果的な撮り方や発信の仕方を学ぶことで得るものも多い。そこで3つの目的を設定。①若い世代と映像の力で地域創生につなげる。②どうPRすればいいか考え抜く力や、壁にぶつかったときに解決する力、アポイントを取るときのコミュニケーション能力など、社会で必要な多くの力を習得。③何かを創り出すクリエイティブな作業の楽しさを実感する。




- 映像スキルの習得
- 非認知能力を育む
- 地域（社会）への貢献

- 人材の育成
- 地域への興味、愛着 UP
- 若者を巻き込んだ地域活性

- 新たな学びの提供
- 地域と学生／生徒の交流
- 将来の選択肢の提示

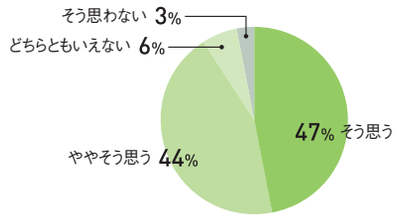
**わかったこと**

撮り旅で得られた「学び」のスキルについて80人にアンケートを実施。「成長した・改善したと思うスキルは?」という設問では、「創造性」「いろいろな方との効果的なコミュニケーション」「問題解決力」「目標達成のための計画性」「学ぶ意思や能力、学び続ける能力」「関係構築・維持」などが挙がる。
自由回答では、「動画撮影や制作のスキルだけでなく、人とのつながりやチームワーク、一人ひとりの意見を聞き合い尊重するなど、人との関わりの大切さやつながりを強く感じることができた」「地域活性化や多くの課題解決に取り組むことができてよかった」などの記述が。

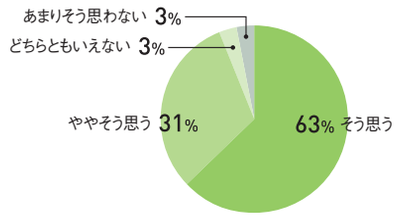
**Q 成長した・改善したと思うスキルは?**

- 創造性
- いろいろな方との効果的なコミュニケーション
- 問題解決力
- 目標達成のための計画性
- 学ぶ意思や能力、学び続ける能力
- 関係構築・維持

**Q 撮り旅を通じて街を好きになりましたか?**




**Q 撮り旅を通じて街の魅力を発見できましたか?**




## 検証事例 2　初学者の興味・関心を掻き立てる アカデミック・ツーリズムプロジェクト

**概要**

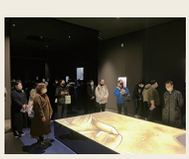
長崎県対馬の博物館、野生生物保護センターなどを2泊3日で巡るアカデミックでディープなツアーを2023年2月に実施。研究者や専門家のアカデミックな話を聞くことで、初めてその場所を訪れる参加者（初学者）の好奇心や学びに影響があるかを検証した。（実施団体:ビーコンつしま、丸善雄松堂、ANA HD事務局）

**背景と目的**

日本交通公社が行った旅行者意識調査（2020）によると、「新型コロナ収束後、旅行先で行いたい活動」として美術館や博物館を選んだ人は0.9%にとどまるなど、旅行中の訪問先として、社会教育施設（博物館、科学館、図書館、公民館、体育施設など）はあまり一般的ではないという背景から、初学者に注目。

**わかったこと**

アンケート調査の結果、「さらに知りたいと思った内容」で多く選択された項目として、専門家に話を聞いた場所（対馬歴史研究センター、対馬博物館、環境省対馬野生生物保護センターなど）と、観光地として感動した場所の2パターンが。ヒアリング調査では「歴史的にも文化的にも国境を強く意識し、その影響を強く受けた地域だと感じた。教科書では断片的に学んだが、専門家から話を聞くことで、改めて学びが深まった」などのコメントが挙がる。



対馬博物館、長崎県対馬歴史研究センター、環境省対馬野生生物保護センターなどで専門家の話を聞いて巡る2泊3日の旅。

## 検証事例 3　住民との交流で高まる多様性の受け入れ。第1回「大人の修学旅行」の比較調査より

**概要**

協議会会員から参加者を募り、2022年7月埼玉県飯能市にて「大人の修学旅行」という旅行企画を実施。参加者を、【観光コース】（観光地巡りなどがメインで参加者同士の交流が目的）と、【地域交流コース】（地域住民との交流が目的）の2群に分け、旅行後、ジェネリック・スキルに関する質問票調査を行い比較分析を行った。

**背景と目的**

旅のどんな要素が人間のどのような能力に影響を与えるのか先行研究では因果関係を含めて不明なことが多い。旅における交流に焦点を当て、交流の質の違いがジェネリック・スキルにどのような影響を与えるのかという観点で実証研究を行った。

**わかったこと**

改善・成長したスキルとして、両コース共通で「認知や気づき」「関係構築／関係維持」が挙がったほか、【観光コース】では、「他人の行動を見て、自分の行動を調整する」「寛容さ」「内省/振り返り」などが挙がった。また、【地域交流コース】では、「いろいろな方々との効果的なコミュニケーション」「文化や言語の多様な環境における適用性」などが挙がったほか、自由記述でも、「コミュニケーション」「会話」「人」など人的交流に関する言葉の頻度が高かった。

**【観光コース】の自由回答**

- 初対面の方と共に行動しながらお互いの個性・特性を確認し合い、自分の行動や言動を調整しながらチームとしての協調性を高める過程があった。
- 共に行動するメンバーとの対話や行動に注力していたような気がしている。気づきを受けて提案したり、自分の行動を調整したりしていた。

**【地域交流コース】の自由回答**

- 知らない土地、違う属性の人たちと時間を過ごし対話するなかで、違う価値観などを理解しようとしながら自分の考えも話せる環境が成長につながった。
- 初めてお話しする地元の方に対して、Yes/Noで答えられる質問ではなく、オープンクエスチョンで会話するように心がけた。

団体は、仮説を検証するためのプロジェクトを次々実施してきた。長引くコロナ禍で大規模な検証はしづらかったが、プロジェクトを通じて明らかになったことはシンポジウムなどを通じて随時公開している。右ページで3つの事例を紹介するが、このほか2023年度の活動として以下のようなものもある。

●**異文化交流・旅の学びの効果検証**
旅もしくは異文化に触れることで中高生がどう成長していくか検証。各学校の既存の活動をベースに、APU留学生との交流機会を設け効果検証を行う。

●**国内旅行と海外旅行における自己効力感形成の比較研究**
沖縄・韓国研修に参加した大学生を対象に国内旅行と海外旅行における自己効力感形成の定量分析と発生要因を比較検証。

●**旅がもたらす学びの効用体系化**
協議会会員に「学びがあった旅」と「学びがなかった旅」をヒアリングし、学びの効用と影響を与えた因子を洗い出す。

●**サイクルツーリズムの効果検証**
ガイドのありなしが五感に与える影響など、「サイクリング×人のつながり×学び」の相関性を調査。

●**「旅の質問ノート」を活用した、人とのつながり×学びの旅の効果検証**
事前に地元の方と協力して作成した質問ノートを活用し、学びの効用や地域愛を調査。

こうした、さまざまなプロジェクトにおいて旅の効用を手軽に検証できるよう、効果測定ツールも開発。イノ旅などの旅の前後で、傾聴力、主体性、独創性、内省力に関する力の向上があることがわかってきた（21ページ図3）。

「おそらくこうした力が伸びるだろう、という仮説と一致する結果が得られることが多いのですが、意外な結果が出ることもあります。例えば、旅をすることで却ってマイナスに振れた項目として、『論理的で納得性の高い結論を導き出す』というものがありました。考え方が違う人たちとの出会いや、さまざまな現実に触れることで、参加者が合理的に判断し、柔軟に考えることの必要性などの気づきを得た結果だと分析しています」（津田さん）

## ポストコロナの旅と学びの新しいあり方

「旅との学びの協議会」が発足した2020年6月といえば、新型コロナウイルス感染症流行による緊急事態宣言下、世の中がステイホーム一色に染まっていた時期だ。当たり前が当たり前でなくなった社会において、旅行をとりまく業界は改めて、旅をすることの意味や価値を自身に問わざるを得なくなった。津田さんは次のように話す。

「実はコロナ以前に、航空業界は、脱炭素社会の実現に向けてどう対応するかという課題を突き付けられてきました。人々の間で、$CO_2$を排出しながら移動することへの罪悪感が高まるなか、それを上回る旅の価値を提示する必要があったのです。図らずもそれを明らかにしたのがコロナ禍だと思います。というのも、話が少し逸れますが、航空業界では顧客動向を分析する際、渡航目的を【ビジネス】【VFR】【レジャー】の3つに分けて考えます。VFRとはVisiting friends and relatives の略。帰省や冠婚葬祭などを含む、人に会いに行くことが目的の移動です。3つのうち、コロナが明けても回復が鈍いのは【ビジネス】のみ。残りの2つは回復もしくは反動により需要が増しています。そう考えたとき、人に会いに行く、あるいは心の豊かさを求めて移動するという欲求は、人間の本能に組み込まれているとさえ思うのです。そうした、より価値の高い移動に収れんされていくことを考えたとき、旅行に携わる事業者として何ができるか。人と人とのつながりという意味では、移動先の地域には多くの人が生活しています。けれどこれまでのパッケージ化された旅では、旅行者と地域の人との間に横たわる壁が壁のままというケースがほとんどでした。それは、とてももったいないこと。異なる人とのコミュニケーションによって体験価値は高まり、多くの学びが生まれます。さまざまな検証を通じてわかってきたそうした事実を、今後の旅や教育のあり方に活かしていきたいと考えています」